

写真や図表で見る 全農のいま



畜産生産部

主な事業内容

- ・畜産・酪農生産に必要な資材の供給
- ・研究開発・検査・講習
- ・生産基盤の支援・補完

畜産研究の最前線

日本の畜産を支える三つの研究機関は、飼料開発、疾病対策、受精卵移植技術の分野で先進的な研究と実践を進めています。生産性向上や環境保全を

目指し、技術開発に加え現場での指導や人材育成も積極的に行い、持続可能な畜産経営の発展に貢献しています。各研究所の最新の取り組みを紹介します。



FILE 1

飼料畜産中央研究所の取り組み

飼料畜産中央研究所は、技術の力で畜産生産者の経営を支えるため、革新的な配合飼料・優良素畜・畜産資材の商品化や飼養管理技術の開発ならびに技術講習会への講師派遣などを行っています。

最近では①育種改良が進む鶏の能力を最大限に引き出す養鶏飼料の開発②肉のおいしさと繁殖性に優れたハイコープSPF種豚の育種改良と飼料開発③和牛・乳牛の生産性向上、省力化や低コスト生産につながる飼料と飼養管理技術の開発④ふん量や環境負荷を低減する環境対策飼料の開発⑤飼料などの栄養成分の新しい分析法の開発——などを実施しています。



試験研究用の牛群管理の様子

FILE 2

家畜衛生研究所の取り組み

家畜を病気から守るための研究・検査・指導・情報発信を行っています。これらは①研究開発室でのワクチンや機能性飼料の商品開発と病気の診断・対策法の確立②クリニックセンターで家畜の衛生検査の実施③クリニック分室で検査結果に基づく農場の生産指導——の3部門で担っています。

クリニックセンターは国内最大級の家畜疾病検査機関であり、年間約20万検体が集まります。クリニック分室は全国5カ所にあり、職員の獣医師が現場の疾病対策と生産指導を行い、全国の畜産農家の生産成績向上に取り組んでいます。



家畜衛生研究所の検査風景

FILE 3

ET研究所の取り組み

ET(受精卵移植)は、優秀な牛の受精卵を別の個体の子宮に注入し、妊娠・出産させる技術です。ET研究所は早くからこの技術開発に取り組み、世界でもET関連の最先端技術を有する研究所です。

我々は、日本の財産といえる和牛の増産のため、酪農家のホルスタインを利用し、和牛生産基盤を守る取り組みを行っています。現在は年間3万個の受精卵と1100頭のET妊娠牛を全国に供給。新技術・新商品の開発にも力を入れるとともに、蓄積した技術力を若い世代に伝え、ETのプロを養成する専門コース(通称「繁殖義塾」)も開講しています。



ET研究所の検査風景

牛の呼気から発生するメタン削減の研究に取り組んでいます。メタンはグェップとして、大気中へ出ていきますが、温暖化への影響だけではなく、飼料エネルギー損失にもなります。このメタンを削減することで温暖化抑制を図るとともに、牛の生産性向上を目指しています。

当研究室では、搾乳ロボット牛舎にメタン測定器を導入し、個体ごとのメタン量を測定しています。測定されたデータを基にメタン産生量の少ない個体に見られる特徴を追跡しています。また今年度からメタン削減資材の添加試験を行い、メタン削減資材の効率の良い給与方法の解明を目指しています。その他にも、肉用牛のメタン測定システムの確立にも取り組んでおり、乳肉でのメタン削減を目指しています。

JA全農畜産生産部
飼料畜産中央研究所
笠間乳肉牛研究室

高山 綾奈さん

2023年入会。主に乳牛の飼養管理、
子牛の代用乳に関する研究を行う。

